

丸山眞男のアメリカ観

(簡略版)

総合政策学部 4年 70801191 江上琢成

はじめに一問題の所在一

- 1、本研究の課題…アメリカ合衆国は、日本と第二次世界大戦で死闘。戦後、日本の民主政に強く影響。アメリカ観は、現代日本にとり常に重要な問題。戦後日本を代表する知識人・丸山眞男（一九一四～一九九六）が、アメリカ合衆国をいかに見たか、という問題は、丸山の思想の特質を考える上でも、日米関係のあり方を考えるためにも、重要な論点。
- 2、丸山眞男…二十世紀の優れた政治学者として高い評価。海外に大きな関心を抱きながら、戦時中の国家体制を厳しく批判し、戦後の民主主義確立に活躍。
- 3、海外と戦中・戦後の関心…①一九三四年東京帝国大学法学部に入学するも、本来、ドイツ文学専攻を志望。卒業後、同盟通信社での海外勤務志望。→若い時期から対外関心。②出征経験を踏まえ、戦中日本人の「無責任」の欠陥を指摘し、戦後日本の方向性を模索。
- 4、四度のアメリカ滞在…丸山のアメリカ観考察の有効性。
 - ・第一期…一九六一年（昭和三六年）一〇月から翌年六月までハーバード大学特別客員教授。その後イギリス直行。
 - ・第二期…一九七三年（昭和四八年）六月、二週間の滞在。プリンストン大学とハーバード大学から、名誉博士号を授与。
 - ・第三期は、一九七五年（昭和五〇年）一〇月から翌年八月。七五年一〇月から七六年四月まで、プリンストン高等学術研究所所員。七六年五月から八月まで、カリフォルニア大学バークレー校の特別客員教授。
 - ・第四期…一九八三年（昭和五八年）三月から六月まで。再びバークレー校の特別客員教授。
- 5、研究史…①平和問題談話会などについて、断片的言及は多数。②三島由紀夫らは、「アメリカニゼーション」をすすめた「進歩学派」と指弾。③丸山眞男とアメリカとの関係を直接論じた論稿は少数。有馬龍夫「丸山先生とハーバード」、清水靖久の「丸山眞男と米国」のみ。⑤有馬は、丸山の第一期アメリカ滞在の回顧。
- 6、清水靖久「丸山眞男と米国」…丸山とアメリカに関する唯一の学術論文。丸山の渡米に際し、ビザが発給されなかった事情に注目。背景として、丸山の米国外交政策批判を推定。第三期以降の滞在の検討保留。→研究余地。
- 7、丸山自身のアメリカ理解の回避…アメリカ観が体系的に総括されない背景に、丸山自身の、アメリカ理解の困難さの明言。一九六七年対談「わたしは……いまでもアメリカはわからない。…だから、帰ってきて、一度もアメリカ論を書きません」と明言。八四年（最後のアメリカ滞在後）にも繰り返す。アメリカ無理解を意識的に貫徹。
- 8、本研究の具体的課題…①アメリカ無理解の意識的貫徹に、その特有性を想定。②丸山のアメリカ観の生涯を通じた展開に見通し。

第一章 戦前・戦中のアメリカ観

1 日米開戦前におけるアメリカの隔絶視

- 1、アメリカ理解に恵まれた家庭環境…ジャーナリストである父・幹治は、ニューヨーク特配員やアメリカ駐在特派員を歴任。父を「ニューヨーク特派員だったこともあって、親米」と評す。後に、父のアメリカ情報に恵まれる。
- 2、「英」「米」の区別…他方、父親の影響で、「英」「米」を区別。背景に、幹治と親英政治家・牧野伸顕との交流。丸山は、戦前のリベラリズムの回顧で、日本とイギリスとの親近性、及び日本とアメリカとの隔絶性について言及。①「重臣リベラリズム」（西園寺公望、牧野伸顕など）は、「親英米派」、「国際協調主義」、②親英米派は、立憲君主制派、イギリスをモデル。共和制やデモクラシーのアメリカに無関心、③満州事変でイギリスは日本と妥協、アメリカは反対。

- 3、親米派とファシズムとの近接性…松岡洋右を例に、戦前親米派の非平和主義、ファシズムとの直結に言及。
- 4、晩年に至る戦前期アメリカ隔絶感の貫徹…八四年、自身のアメリカ認識を総括。「欧」「米」の差異を明言。丸山自身、大学三年まで、アメリカについて映画のギャングや巨大金融資本程度のイメージしか持たなかったと明言。

2 戦前におけるアメリカ民主政の重視

- 1、アメリカ民主政の重視…他方で、日・独のファシズムや日米関係悪化によって、アメリカの民主政に注目。一九三八年「英米及び独逸政治学界」紹介。ドイツのファシズム体制を危惧。英米の、多様で自由な議論を評価。
- 2、父・幹治を介したアメリカ情報…イギリス大使館（アメリカ大使館？）は、幹治に宣伝文書送付。この影響を受け、戦後、三島庶民大学の講義で、英米デモクラシーを評価する講義録を作成。
- 3、アメリカ映画の民主政に感涙…丸山は太平洋戦争開戦直前、アメリカ映画『スミス氏都へ行く』のリンカーンのゲティスバーグ演説朗唱場面「消え去ることなかるべし」で感涙。ファシズムを悲嘆、アメリカに民主主義の永続を期待。

3 太平洋戦争中のアメリカ観

- 1、自身の開戦反対…日米開戦について、自身は「絶対戦うべからずという派」であったと回顧。
- 2、周囲の楽観視…当時、多数が「戦争は不可避だけれど、……勝つとは思わなかった。さりとて負けるとも思わなかった」と考えていたと回顧。丸山も、ハル・ノートの内容上、戦争不可避視が、当時の「普通のリアリズム」と回顧。
- 3、信念維持の困難…丸山は英米に正義があると考え。しかし困難。「われわれのほうがおかしい」という不安。
- 4、英米言及の停滞…四一年から四四年までの著作所収『丸山眞男著作集』第二巻、ほとんどアメリカ言及なし。
- 5、戦争長期化の嫌悪…和辻哲郎が、一九四四年に、アメリカを過小評価したことを、「あれはひどい」と、後年回顧。
- 6、鶴見和子からの特殊情報入手…①サイパン陥落直後、「戦争はこれで決まった」と会話。②和子の父・鶴見祐輔の職務上、太平洋問題調査会（IPR）の中国派の天皇制廃止論と、日本派の「天皇制護持」対立について情報入手。
- 7、被爆と敗戦…終戦の直前、基本的人権の尊重などをポツダム宣言の情報を入手し感動。広島の子供で被爆するものの、敗戦について「日本の敗北を自分のこととして悲しむ気持ちになれなかった。…“やっとなされた”」と回顧。

第二章 敗戦後のアメリカ観

1 敗戦直後のアメリカ観

- 1、アメリカ＝資本主義観による占領政策の驚愕…丸山は、占領政策をほぼ予想しながらも、治安維持法や特高警察の廃止、政治犯即時釈放を、共産党許容政策と見なして驚愕。理由に、アメリカ＝資本主義の先入観。
- 2、占領政策と「近代」認識…従来、丸山は、「近代的」市民的国家を否定。しかし戦後には、日本では市民的国家ですら達成されていなかったと認識。「近代」の到来を理想視。当時の日本を、「ダグラス・マッカーサー元帥から近代文明ABCの手ほどきを受けている現代日本」と表現。
- 3、国辱的占領政策の問題視…①八九年、占領政策が「ゆるやかな軍事占領」であることを認めながらも、「当時の解放感を味わった人は…GHQそのものに対して甘かったわけではない」と回顧。②アメリカは、占領軍専用電車に「パンパン」（即席娼婦）を載せるのを見せつけ、日本人に敗北意識植えつけ。③四六年の食糧難で、戦争の惨めさを日本国民に知らせるため、食糧を容易に出さない。③マッカーサー憲法草案第一条の「人民主権」明記にアメリカの性格反映。『タイム』が、日本国憲法を「しかたなしデモクラシー」、と表現したことを国辱感として回顧。
- 4、一九四六年のアメリカ批判…四六年、ハロルド・ラスキ（元ハーバード大学教授）に依拠し、第一次大戦後の連合国の失策を例に、第二次大戦後の連合国政策に不安。十四カ条の失策などを根拠に、「大西洋憲章」についても懸念。

2 冷戦勃発期のアメリカ観

- 1、占領政策の変遷…冷戦に伴い占領政策変化。四七年の二・一ゼネスト中止命令が、民主化から抑圧への端緒。「逆

コース」について、①四七年のトルーマン・ドクトリンによる共産主義締め出し、②五〇年年頭のマッカーサーの自衛隊容認声明、③五〇年六月の朝鮮戦争勃発、の展開と認識。「五年足らず」の変化を「なんとも短い春だった」と回顧。

● 2、丸山の発言の変化…①四八年、日本の軍人勅諭「上官の命令は陛下の命令である」に対し、アメリカ軍隊内務令「上官の合法的命令には服従の義務あり」は、客観的価値の独立があるとして評価。②五〇年六月に朝鮮戦争勃発。同年九月、アメリカ民主主義の欺瞞性を指弾し、日本再軍備を批判。③平和問題談話会で活躍する丸山は、一二月「三たび平和について」で、核戦争を特徴とする第三次世界大戦が勃発した場合、アメリカは復興に寄与し得ないと警告。

● 3、丸山のレード・パーズ危機…丸山は、パーズを覚悟するも、抵抗を促され、五〇年十月の反対集会に参加。

● 4、日米安保懸念…一九五一年、サンフランシスコ講和条約と日米安全保障条約との「抱き合わせ」について指摘。向米一辺倒の単独講和は、ソ連や中国を仮想敵国。日本政府が米国を評価しても、アメリカは国益重視と注意喚起。

● 5、国際社会の組織化批判…一九五二年『政治の世界』でアメリカ認識以下三点。

①冷戦について、「米ソ両国が、国際社会の組織化を目指した争い」と規定。←国際社会の組織化批判。丸山は、「二つの世界」よりも「多元的な世界」を理想視。ヨーロッパが、経済復興後、アメリカから独立することを予測。

②アメリカの権威変化の危機…マックス・ヴェーバー「支配の諸類型」に依拠。合衆国憲法が維持してきたアメリカの権威は、大衆デモクラシー勃興後、指導者のカリスマに依存。ルーズベルトはその典型。大統領制に伴う、諸機関の牽制の性格は、二十世紀、諸機関の協同に変化。統一的な国家意志が自由を抑制。←丸山は大衆の「非政治化」の打開を提言。

③「自主的組織」期待…ラスキに依拠。アメリカ民主政は、巨大ジャーナリズムに画一化されやすいが、他方で、自主的組織の抵抗力が、民主政の健全性を保つものと期待。

● 6、『現実』主義の陥穽」でアメリカ認識以下二点。

①西欧の反米…日本は「力による平和」自明視。しかしフランスやイギリスは、アメリカに不満。

②文官優越制の問題指摘…マッカーサー罷免に表れた文官優越制は、戦争危機を低下させず。罷免は単なるマーシャル・ブラッドレー派の勝利。国防省首脳部は政治的発言権を強化。文官優越制を、最も有効な戦争指導体制と説明。

● 7、黒人差別問題批判…ラングストン・ヒューズ紹介。「人種問題が現代デモクラシーのアキレス腱」と指摘。

3 マッカーシズム批判

● 1、一九五二年「ファシズムの諸問題」…マッカーシズムに焦点を当てた初の本格的なアメリカ論。①マッカーシズムが、自由を圧殺していると指摘。ラスキやトクヴィルが、「アメリカほど真の精神の独立と討議の自由が少ない国を知らない」と指摘していることを紹介。アメリカのファシズムについて「ブルジョア階級自らの軍国主義化」と指摘。

● 2、一九五三年「ファシズムの現代的状況」…先進国のファシズムの可能性を喚起。本来、アメリカ民主主義は、革命権を肯定、少数意見を歓迎。しかしアメリカは忠誠審査法を制定。「権力による強制的同質化」と指摘。丸山は、「デモクラシーとは、素人が専門家を批判することの必要と意義を認めることの上に成立っているもの」と喚起。

● 3、アメリカ失策批判…一九五三年、「テクノロジー」発達による戦争予測の困難性や、途上国に対するアメリカの援助失敗について言及（朝鮮戦争の爆弾量が、太平洋戦争の三倍であること、バオダイ政権や蒋介石への援助失敗など）。

● 4、マッカーシズム批判継続…一九六一年までマッカーシズム批判著述。一九七六年、バークレー滞在時にも回顧。批判の一要因に、戦前から交友したカナダ人研究者、ハーバート・ノーマンが、自殺に追い込まれたことに対する私憤。

4 アメリカ市民武装の理想視と安保闘争

● 1、市民武装の理想視①…五七年、日本人の自立を促す際に、アメリカ民主政治の学習を喚起。合衆国憲法は、武器携帯権を規定しているが、日本ほど国民が武装解除されている国は世界でもまれであるとして問題視。

● 2、市民武装の理想視②…六〇年三月、市民武装について急進化。「外国の軍隊が入って来て乱暴狼藉しても、自衛権のない国民は手を束ねるほかはないという再軍備派の言葉の魔術」を無効にするために、ピストルを配給すべきと提言。

● 3、安保闘争における市民抵抗の期待の結実…丸山は、安保闘争によって、アメリカが、新安保条約締結について「形式的には成立したが、こんなものができて何にもならないじゃないか」と懸念するようになったことを評価

第三章 渡米後における丸山のアメリカ観

1 第一期アメリカ滞在

- 1、渡米延期事情…六一年渡米。五八年からハーバードに招待されていたが、安保反対運動によって延期したと回顧。
- 2、アメリカの大学状況…アメリカでの日本近・現代史研究隆盛を指摘。
- 3、家永三郎へのアメリカ国情論…一九六一年一二月の家永三郎への私信で、アメリカの国情論。
 - ①ハーバードにおけるキッシンジャーの限定戦争論への批判視…限定戦争論（戦術核兵器の局地的使用）の批判。
 - ②反面、アメリカ全体における右翼の大衆的浸透を指摘…個人の右傾化から、集団右傾化への変化に警戒感。
 - ③アメリカの多様性や矛盾に高い関心…「しかしなにしろ広い国ですから、……矛盾した側面があり、それが面白い」。
 - ④学者の勤勉賞賛…大学院生と中心とする「学問の世界」の「オープンな競争」を「学ぶべき」と賞賛。
- 4、アメリカ人の丸山批判…七六年、政治学者として「政府与党に影響力を行使せよ」と批判されたことを回顧。
- 5、丸山の被爆体験主張…六九年、①あらゆるアメリカ人が、自身の被爆談に関心をもったこと、②アメリカ人は原爆に共通の罪悪感を抱いており、右翼の人間も、原爆の主張に反駁しなかったこと、③日本人は義務として国際社会に対して、被爆国民であることをもっと自己主張すべきこと、を回顧。←特異。本来、丸山は「原爆観」を意識的に放棄。
- 6、滞在によるアメリカ無理解の深化…六二年「何年居てもどれほど分るものではないという諦めの気持」明記。
- 7、帰国後のキューバ危機回顧…丸山はオックスフォードを経て日本に帰国。キューバ危機直前に、バミューダで学術会議に参加した丸山は、危機に切迫感。六四年、詳細に、イギリスに滞在時におけるキューバ危機の緊張感について回顧。
- 8、帰国後のアメリカ観…六五年「憲法第九条をめぐる若干の考察」は、ニクソンが日本国憲法の戦争放棄条項を後悔したことなどに触れながら、米ソの核開発拡大の危険性について詳述。これとの対比で憲法第九条の存在意義を述べる。
- 9、アメリカ無理解の明言…六七年の、鶴見俊輔との対談で、アメリカの体系的認識の放棄を明言。実際にヨーロッパとアメリカに行った経験を根拠にして、ヨーロッパへの親和感とアメリカに対する違和感を告白。
- 10、ベトナム戦争認識…六五年以降ベトナム反戦運動参加。戦争を推進の勢力と、抑止する勢力の多様性を指摘。

2 第二期アメリカ滞在

- 1、一九七〇年代のアメリカ関心…在米中の三谷太郎に「アメリカを見たい」と私信。アメリカ関心を維持。
- 2、第二期アメリカ滞在…七一年東大辞職。七三年ハーバード大学とプリンストン大学の名誉学位授与。二週間滞在。
- 3、清水靖久の研究概略…ビザが容易に発行されなかったことに注目。レッドページ反対などが理由と推定。
- 4、第二期アメリカ滞在の回顧…丸山は、①この滞在時に、前駐日大使ライシャワーに招待されて、ビザが発行されなかったことを伝えたところ、ライシャワーから苦笑されたこと、②プリンストンの学位授与式で、当時の財務長官にも学位が授与される際に、ベトナム戦争反対の意思表示として、二十人の学生たちが背を向けたことなどを回顧。

3 第三期アメリカ滞在

- 1、プリンストンの印象…七五年一月以降の第三期アメリカ滞在は、十ヶ月。プリンストンはショッピングが不便だが、古参者が新参者の面倒を見る相互扶助の「伝統」により助けられていること、などを伝える。
- 2、当該期のアメリカ評…「ポスト・ヴェトナム」「ポスト・ウォーターゲート」と表現。
- 3、アメリカの思想界の三勢力…①思春期の左翼、②ベトナム戦争以後シニカルになった正統リベラル、③イデオロギーに関係ないユダヤ人の勢力、の三つの勢力によって特徴付けられていると説明。
- 4、思春期の左翼…①若い左翼系研究者、②極左セクト、③プリンストンの生協書籍部における左翼系思想家の書籍。また新左翼系の若い研究者の活躍によって、E・H・ノーマンの名誉が回復されていることを評価。
- 5、シニカルな正統リベラル…建国二百年にも関わらず、愛国心が盛り上がりえないという状況や不況による右傾化。
- 6、ユダヤ人の強勢…ユダヤ人強勢は新聞に反映。新聞は偏向が少ないが「ユダヤ人問題だけは別」と記述。

- 7、西海岸の印象…七六年五月からカリフォルニアバークレー校。「ブラック」が少ない。スペイン系、アジア系多い。
- 8、バークレー滞在期の政治状況…カーターの民主党大統領候補受諾演説。カーターの「アメリカ民主主義の精神的価値の過剰強調」について、「ウォーターゲートで極致に達した権力リアリズムの陶醉への『反動』」と評価。
- 9、第三期アメリカ滞在総括…「エゴセントリズム」と「内発的告発」の両極を「面白い」と評価。

4 第四期アメリカ滞在

- 1、当該期バークレー校の高評価…八三年三月から三カ月。再びバークレー校特別客員教授。この年一月の人気投票で、バークレーが、アイビー・リーグを抜いて第一位。ハーバードなどの連想を「十年以上おくれた頭」と批判。
- 2、当該期の政治状況…バークレーが、元カリフォルニア州知事レーガンの膝元でありながら、支持されていないと記述。カトリックの集会が、核凍結と政府の核政策反対論を裁決したことに注目。宗教者の平和運動に対する貢献に「感服」。
- 3、アメリカの日本に対する過大評価警戒…過大評価とは、①日本の詰めこみ教育、②日本の自発的軍事増強。安保以来、アメリカと接触してきた日本人の責任と記述。日本に対するアメリカのイメージが崩れることを懸念。

むすび

- 1、滞米満足観…七九年の時点で、「私もハーバードなり…プリンストンの研究所なりかなり長く暮しました」と回顧。
- 2、アメリカ隔絶感の堅持…しかし八四年、シンポジウム「福沢諭吉と新渡戸稲造」で、アメリカが遠いという認識。
- 3、「アメリカ無理解」の意味①—大きな関心の反映—意識的にアメリカに関する体系的理解の拒否を持続。しかし、アメリカに対する無関心を意味しない。むしろ問題関心の巨大さ故に、理解の限界を認識。問題関心が大きい対象について理解を放棄する丸山の態度は、師である南原繁や原爆に対する認識にも見られるように、丸山の思考傾向の一つ。
- 4、「アメリカ無理解」の意味②—「イメージ」拒否と現実重視—丸山は、「丸山学派」という、自身に関する「イメージ」の肥大化と、現実とは異なるアメリカの「イメージ」の肥大化との共通性を指摘。「イメージ」と現実とを区別。
- 5、「アメリカ無理解」の意味③—優れた歴史意識の反映—丸山のアメリカに対する隔絶感は、思想家としての時代の変化に対する敏感さを根拠にするもの。すでに五三年、戦後では、ジェット機の開発により交通技術が劇的に進歩したものの、戦前については、太平洋が交通路とはみなされていなかったことを指摘。
- 6、「アメリカ無理解」の意味④—「問題発見型」アメリカ観—荻部直氏は、丸山を「体系建設型」の思想家として考えすぎることの問題を指摘。「丸山が時代の変転のなかで、さまざまな問題を見だし、それに応答してきた姿を動的にたどる」という「問題発見型」の性格を重視。丸山は、「問題発見型」性格で、アメリカの多様な現実注目。
- 7、本研究総括…政治学界の中枢にいた丸山は、在外研究の機会にも恵まれ、アメリカの変化を、身を以て体験。
- 8、丸山のアメリカ観の現代的意義①—北朝鮮問題に関して—丸山のアメリカ観は、現在でも意味を持つ達見。第一は、北朝鮮問題。アメリカと北朝鮮との直接交渉の可能性に言及。日本が、アメリカに対する「『従属』ナショナリズム」に陥ることを警戒。←北朝鮮による米朝二国間協議の要求に対する応対や、六カ国協議における日本の義務を予期した鋭い指摘。②戦争暴発への警戒も重要。朝鮮戦争を踏まえ、「どっちが侵略したというより、どっちが手を出してもおかしくないような状況の方が重要」と発言。←冷戦構造が残存している朝鮮については、丸山の認識を継承すべき。
- 9、丸山のアメリカ観の現代的意義②—アメリカ単独行動主義に関して—第二には、アメリカ単独行動主義に対する警戒。丸山にとり、冷戦後のアメリカ認識は、一つの難問。丸山は、湾岸戦争で、アメリカが「世界の憲兵」と呼ばれたことについて、一方では「国際的な中央権力」が主権国家を制限しているという点で、「半分正しい」と、戸惑いながらも許容。しかし他方ではアメリカが国益や「主権国家の原理」を捨てられないとして警戒を持続。←この懸念は大量破壊兵器の確定がないままイラク戦争に突入したような、二十一世紀アメリカのユニラテラリズムに表われることになる。
- 10、丸山の日米関係史の重視…八五年、丸山は、日米関係の変化に言及しながら、歴史に学ぶ態度の重要性を力説。日本人について「あれだけひどい目に会い、かつ近隣諸国をひどい目に合わせながら、そこから一体何を学んだのか」、「ほんとうに何と忘れっぽい国民だろう」、「戦争中は鬼畜米英といい、枢軸による世界新秩序を謳歌しながら、戦後に米英の自由主義陣営万々歳、とくにアメリカ一辺倒になっちゃったという人がいます」と批判。その際に、「歴史から学ば

なければ同じ歴史を繰り返す」と警鐘。

● 1 1、結論…「テロとの戦い」など二十一世紀固有の問題に伴って、日米関係が新たに問い直されつつある現在、丸山眞男のアメリカ観が残した遺産は、いまだに大きい。